

DNR

副院長 外科 塚本 文仁

人は誰でもその最期には尊厳ある死を望むものです。しかし、かつてはその臨終の際に、心臓マッサージや気管挿管などのいわゆる心肺蘇生処置が時には儀式的に行われていました。

癌の末期、老衰、救命の可能性のない患者などの場合、これらの処置は患者にとって不要かつ望ましくない、さらには体に傷をつけることがある治療であり、これらを避けることが本来の尊厳死の概念につながります。そこでこの様な患者に対しDNR(Do Not Resuscitation)=心肺蘇生処置を行わない=という考え方が当然でできたのです。ただし日本ではいまだDNRについての社会的合意が十分に形成されているとはいえず、またガイドラインや法的規制もないのが実情です。

最近では、患者本人とはほとんどの場合できないものの、その家族や代理人との話し合いにより、DNRとするかどうかにつき前もって意思決定をしておくことが医療現場では日常的になっています。

ただしここで注意すべきは、DNRは「何もしない」、や「治療中止」を意味するものではなく、「心肺停止後の蘇生処置だけを行わない」ことであり、それ以外の緩和ケアを含めた一般的な治療は当然最後まで十分に尽くされるべきものです。われわれ医療者はこのことをしっかりと認識して、様々なDNRの患者と日々向き合っているのです。

七夕コンサートが開催されました！

7月3日(火)に成章小学校による七夕コンサートが開催されました。

当日は13時30分より、病院ホールにて吹奏楽の演奏や合唱をおよそ100人の方々が楽しみました。入院患者の方々も多数聴きにきていただき、大変満足された様子でした。30分ほどのコンサートでしたが楽しい時間を過ごせました。

